

## 散歩のつれづれ

今日 あした

以前はテニスコートが何面もあった場所を大手の建築会社が買い取って、コートヒルズと名付け、一軒が、三十坪から五十坪の土地にして売り出した。

そこに、瞬く間に、色とりどりの意匠を凝らした二階建ての家が立ち並び、主に、若い人たちが住む町ができていた。しばらく来ない間に、空き地すらなくなっている。

藍子の家はずっと駅よりなので、散歩でもしなければここは通らない。十二月になったばかりの寒い日だった。

ぶらぶら歩いていると、その中の一軒から異様な光景が飛び込んできた。歩をゆるめて見ると、門から玄関まで五段ほど大理石風の石段がある。その中央に、チャイルドシートを前後につけた自転車が横倒しになっていて、周りには植木鉢が散乱している。中の土はからからになり、枯れた植物をつけたまま植木鉢から飛び出して石段を塞いでいる。

夫婦喧嘩でもしたのだろうか。玄関の木のドアは、眼の高さにスタンドグラスがはめ込まれていて、外側に飾り金具が付いている。ドアの横には、しゃれた植木鉢スタンドがあるのだが、全部枯れていて、何日も前からこの状態が続いているような感じなのだ。

立ち止まってじろじろ見るのとはばかられ、コートヒルズをはずれて、ずっと先まで行き、ふたたびあの家のあたりに帰って来た時にはすっかり暗くなっていた。

と、どうだろう。五十軒ほどあるほとんどの家々は、クリスマスツリーや、サンタクロース、トナカイ、星の帯等がライトアップされキラキラときらめいていた。ここだけが別世界のようで、自然に顔がほころんだ。さっきまでいた実家でもやもやした気分が払拭されてくる。

思い切って散歩に出て良かった。

車で二十分程の所に、藍子の実家がある。

九十二才になる母が一人暮らしをしている。敷地内には兄の克彦一家が住んでいるのだが、母と折り合いが悪く、話をするたびに諍いになるので、必要なことは、藍子を通して言っている。

母が九十才になった時、頼まれて、克彦の妻に、夕食のおかずだけでいいから母の分も作ってもらえないかと掛け合ったら、夕方になると無言で、夕食を盆に載せて台所のテーブルに置いてくれるようになった。

以前にもそんな時期があったのだが、母は「一言ぐらい挨拶しても、罰は当たらないんじゃない」と、憎まれ口をたたき、嫁は「これで嫌なら、ご自分でどうぞ」などの応酬があり、一週間と続かなかったが、今回、母は藍子に、「嫁は料理が上手いから、毎日美味しいものが料理屋で出るような器に盛り付けられて、一汁三菜届くとよ」と言って喜んでいる。

宮崎生まれの母は、ずっと標準語を使って来たのに、年をとると共に宮崎弁が頻繁に顔を出すようになり、それと共に肩肘張って突っ張っていた所がゆるんできた。嫁がツンツンしていても、置かれた料理だけを見ることにしたらしい。そして、藍子には「ご飯くらい自分で炊かんとね。朝は自分でしたくもするとよ。そのくらいはしなないと人間ぼけてしまうじゃろう」と言っている。

週に二回、ヘルパーが来てくれる。どこも悪くないのだが、九十才を過ぎると、無条件に要支援となり、介護を受けられるので、掃除と買い物頼んでいく。

又、週二回、デイケアに行つて、一日は手芸を、一日は書道を習ってくる。昼食が出るので、一日遊んで夕方帰つて来るそうだ。書道をしたり、テレビを見ながら編み物をしていると、一人でいても淋しくないと言っている。

それらのスケジュールは、全部、市報を読み、市役所に出向いて、母自身で掛け合つて決めたものである。

煩雑なゴミ出しから、自分の生活設計まで、何度も聞かされる。それとは別に「藍子はまだ若いから分からんだろうけど、九十を過ぎると、ほんのちよつと動くのにも大変な労力があるとよ」と言い、その生活設計の中には藍子もどつぷり含まれている。市役所や銀行巡り等の実用から、墓参り、デパートめぐり等の楽しみまで、車に乗せ、車いすを積み込み、母の思うがままに動くのである。

今日も、お昼を一緒に食べようとお呼びがかかった。

藍子は、現在夫と二人暮らし。彼は毎晩遅く帰つて来るので、行くのはやぶさかではないが、母に振り回されているような気がしないでもない。

「指輪がなくなつたとよ」食事が終わり、お茶を飲んでいる時に言いだした。ずつと思ひ悩んでいたようで、暗い声だった。

「どんな指輪？ 私は見たことがある？」

「さあ、どうだったかね、オレンジのオパールの周りにダイヤがついているとよ」

「わからないわ。いつ買ったの」

「いつだったかね。何日か前に、ヘルパーの青山さんに見せたよ。その後、金庫にしまわないで置いてすっかり忘れとつたら、どこを探してもないとよ。青山さんが持って行ったとじゃないかね」

藍子は、しゃきしゃき仕事をする勝気そうな青山さんの顔を思い浮かべた。

「そんなはずなでしょう。どこかにしまい忘れたんじゃないの、金庫の中をもう一度見てごらんなさいよ」

二人で、引き出しという引き出しを全部開けて、金庫の中も一つずつ確かめながら見たけど、どこにもない。

「いくら探しても無かったものが、何カ月かしてひょっこり出てきたりするから、どこかから出てくるわよ」

「出てはこんと思うよ。青山さんが持って行ったんじゃないから」

「そんなことはない」「いやそうじゃ」さんざん言い合った挙句、藍子は「証拠もないのに、いつも親切過ぎるほど世話を焼いてくれるのに、疑うわけにはいかないじゃない。もし、お母さんの言う通りだったとしても、今回は黙っててね」と懇願して実家を後にしたのだった。

井の頭線の久我山と京王線の千歳烏山の間、寺院通りがある。関東大震災で焼け出された浅草にあった寺が、こぞつて、移ってきたそうさ。

久我山から行くと、最初に、高源院がある。冬になると、雁が渡って来る寺と、テレビで紹介されることがある。

今日の午後、実家に行かなくてはならない。福祉事務所の人が兄の所に来ると言っていたけど、母の介護認定の時に来た、精悍そうな男の人かしら。福祉事務所ってどこの管轄なのだろう。名刺の肩書きはなんだっただろう。頭の中を福祉事務所関連の事が、連想ゲームのように去来する。

ああ、もう高源院だ。

門を入り、左側の植え込みをくぐり抜けると、池があり、赤い橋がかかっている。そこを渡ると池の中に瓦屋根の赤い浮御堂があり、回廊をぐるりと回ることが出来る。雁はまだ渡って来ていない。亀がたくさんいて、寒い日なのに、日が照っているので、所々に設けられた木の台の上で甲羅干しをしている。

それにしても、テレビに出るような寺なのにいつ来ても誰にも会ったことが

ない。日に照らされて、首を甲羅から突き出している亀を、欄干にもたれかかりぼんやりと眺めながら、藍子は、青山さんの怒りを含んだ顔を思い出した。

「藍子さん、工藤さんからこんなお手紙を頂きました。読んでみて下さい」

工藤というのは実家の姓である。母はやっぱり黙っていることが出来なかったのだ。

青山さんは、母が九十才になり、介護保険を使って、お願いできるようになった当初から来てくれている六十位の人で、掃除が上手く、置物に至るまで痛性にキュッキュッとふいて隅々まで綺麗にしている。午前中二時間の約束なのに、時には布団を干し、夕方は好意で片付けに寄ってくれたりもする。母もそれなりにお礼はしているようで、良い人が来てくれて、母はうまくやっているかと常々思っていた。

手紙の内容は、普段からのお礼と、断定的に、あなたが持って行った私の指輪を返してほしいと書かれていた。

「藍子さん、あんまりです。あなたも私の事はご存じでしょう。根も葉もないことで疑われて、私は悔しくて仕方ありません。藍子さんはどう思われますか。私は、こんな事を書かれて、もう二度と工藤さんの家には来るつもりはありません。この手紙を福祉事務所の人に見せて、そう言ってきました」

「ごめんなさい。申し訳ありません。母の勘違いです。どこかにしまい忘れているのですよ。ほんとうに、嫌な思いをさせてしまってます」

「勘違いって、藍子さんは私のことを疑っているのですか。なぜ工藤さんが間違っていると言って下さらないのですか」

「母が思い込んでいるだけで、青山さんがそんなことをする人でないことは良くわかっています。本当にごめんなさい」こんなことしか言えなかった。

青山さんは体中から腹立ちを発散させながら、自転車で帰っていった。

昨夜は、克彦から、福祉事務所の人が来るそうだから、藍子も来るようにと電話があった。

「お袋は、何だって思いこむんだ。お袋がいい加減なことを言っているのに、お前がちゃんと、そうじゃないと言ってやらないから、周りの人みんなが迷惑するんじゃないか」

「でも、一緒に捜したけどないのよ」

長兄とは九才年が離れている。間に次兄と姉がいるのだが、地方に住んでいるので、めったに東京には出てこられない。

「あの青山さんって言うのは、なかなか気のいい人だよ。ヘルパーというのは、庭掃除をやっではいけないことになっているんだろう。それなのに、お袋は、青山さんが来ると自分で庭掃除を始めるんだ。彼女は見ていられなくて、しょっちゅうガミガミ言いながら手伝っているんだけど、おふくろも負けていないで、二人で言い合いをしているよ。二階から眺めていると、いいコンビだと思うよ」

「そりゃあ、青山さんは良い人よ。だけど、指輪がなくなって、おかあさんは困っているじゃない」

「そうやって、何でもお袋の言いなりになるから凶に乗るんだ。お袋のいい加減な我儘で、ヘルパーが来なくなったらどうするもりだ。明日は絶対、余計なことを言うなよ」

何度言っても、克彦兄には、指輪がなくなった、という言葉は耳に入らないようだった。

気が重いなあ、と思いつながら高源院を出たら、自然に足がコートヒルズの方に向かった。

あの家は、どうなったかしら。だんだん早足になり近付いたら、車庫にワンボックスカーが入っている。この前は、玄関に気を取られていて、気が付かなかったのかも知れない。車庫から奥の方を見ると、雨戸が閉まっているが、二階を見上げるとベランダにはハンガーに吊るした洗濯物が少し干してあった。

やっぱり、夫婦喧嘩をして奥さんだけ家出をしたのだわ。と推測して、藍子はまるで大きな収穫があったような気になり、散歩を切り上げた。

福祉事務所の人はやはりあの精悍そうな人だった。最初の時は、優しくて頼りになるような人に見えたのだが……硬い表情で、ヘルパーに疑いがかけられるとどんなに困るかを、のらりくらりと説明し、利用者の母のことは、デイケアなどで聞き取りをしたほんの些細な勘違いなどを並べ立てて、やはり工藤さんは痴呆が進んでいますねと、さも困ったことになったと言う表情で結論付け、克彦に同意を促した。

克彦も「だいぶ進んでいますよ、困ったものですよ」と調子を合わせていた。

その後が大変だった。今までのように、一人のヘルパーが親身になって来てくれるのではなく、毎回違うヘルパーが来て、事務的に言われたことを片付け

るようになった。

藍子は、散歩の度に次々に替るヘルパーの顔や動作をまるで値踏みするように意地の悪い目で思い出している。デイケアに行っても誰からもまともに相手にされないのではないかとばかり考えてしまう。以前のように、空の色や、木々のざわめきを感じている余裕はなかったが、家に居ても落ち着かず追いつてられるように散歩に出た。

お正月になった。

藍子は、時代劇にでも出てきそうな寺院通りの、立派な門松を立てた寺の門を左右に見ながら車いすを押ししていく。

父が他界して以来、お正月の三が日、母は藍子一家と一緒に過ごしているのだが、今朝は、お正月を祝っただけで、もう帰ると言いだした。実家は古い日本家屋なので、隙間風は吹くし、狭い庭は手入れのしていない木に覆われて陽も差さない。世間が浮かれている時、寒々と背中を丸めて炬燵に入っている母を思い浮かべて、藍子は引きとめるつもりでオーバーを着せ、ひざかけを掛けて車いすで連れ出した。

寺院通りの中ほどに差し掛かると、門のわきに「喜多川歌麿の墓がある寺」と彫られた石碑がある。車いすで中に入っていくと、それはごく普通の長方形の墓だった。母は、むすつと、面白くもない！という顔をしている。

「そうです。お正月早々、有名人のお墓を見ても何にもならないわよね」おどけて言ってみても反応は無し。

散歩コースをぐるりと回って、更に遠回りをしてあの家のあるコートタウンに差し掛かった。

静かだ。留守をしている人が多いのだろうと思いつながら、あの家の近くに来た。道路にワンボックスカーが出ている。

家出をした妻を迎えに行くのだろうか。藍子の頭の中では、この家の主婦は夫婦喧嘩をして、子供を連れて実家に帰ってしまったことになっている。

「この間、話した家よ」母の耳元で藍子が言った。

「ああ、散らかった家ね」「しっ、聞こえちゃうわよ」と言い合いながら門の前まで来たら、ロングヘアを頭のでっぺんでまとめた背が高く、がっちりした体格の女性が、赤ん坊を両手に一人ずつ抱いて大理石風の階段を下りて来るどころだった。

自転車は片付けられたわけではなく、積み上げられた物に斜めに立てかけて

ある。散乱した植木鉢は足で脇によけたように、隅に移動している。腕に抱いた赤ん坊は双子だろうか、生後六カ月といったところだろう。一人が背中をのけぞらせて、玄関から出てきた飛び跳ねる男の子にじゃれつかれている。もう一人はじつと前を見ているが、唇を突き出して、ブルブルと唾を泡にして飛ばしている。玄関わきにはもう一人小学校に入ったかどうかという年頃の男の子が、家と塀の間に積み重なった物の中から、子供用の自転車を取り出そうとしていた。

最後に出てきたお父さんとおぼしき男性が「おいおい、出かけるのだから、後にしろ」と、声は大きいですが、優しそうな口調で言っている。

一瞬の内に通り過ぎたのだが、藍子も母親もしっかり見ていた。

「壮観だったわね。夫婦喧嘩じゃなかったみたい。それどころじゃなかったのね」

「若い人は元気がいいね」

母は、最近のうつつやしさをどこかに追いやってしまったように、明るい顔をして言った。

藍子は、青山さんと母の言葉を思い出し出していた。

「青山さんは何でもきちんとしなさるね。テーブルの上も青山さんが来なさると、いつの間にか綺麗に片付いちよるが」自分で出来ない情けなさが言わせているのか、浮ついたほめ方をしているなど藍子は思った。

「行ったり来たりする時に、いつも気にかけて見ていると自然に手が動くのですよ」

青山さんは親切心を丸出しにして答えていた。

母は、ムツとして、曖昧な顔をしていた。

藍子はふつと思った。母は、昔から我儘だった。

さあ、これから母を送っていこう。藍子も気持ちの切り替えが出来た。したいようにするのが一番。

「お母さん、お義姉さんは、お正月のお料理を届けてくれるかしらね」

藍子が言うと、母は、にっこりと笑った。黙って料理だけを置いていく嫁は、今の母の一番のお気に入りかもしれない。